

ロイの想い

ジョニーが案内した岸边では、ロイが一心不乱にアテナの石像を彫っていた。既に、その場には8体のアテナ像が円を囲むように並べられていた。

ロイは歌いながら金槌^{かなづち}を振るっていた。

♪ 胸がくるしい

♪ こんな事は初めてだ

♪ 君を忘れることが出来たら、どんなに楽だろう

♪ でも、君を思うことが唯一心を癒^{いや}す

♪ もう一度会えたら

♪ もう一度話せたら

♪ 今、この夜空の下で

♪ 君は見ているのだろう

♪ 君は遠くへ行ってしまった

♪ 宮殿ですれ違っても

♪ もう声をかけることはできない

♪ もう一度話せたなら

♪ もう一度その笑顔を見られたなら

♪ 今の僕にできることは

♪ ただ君の姿を彫り続けることだけ

♪ それでも

♪ それだけでは

♪ この心は満たされない

♪ 君に会えたなら・・・

♪ ああ

♪ 君を想うことだけが

♪ 今も唯一

♪ 僕の心を癒してくれる

ロイの前には市場を駆けるアテナの姿が等身大の石像で完成した。石像は、彼を見詰め、今にも話しかけてきそうだ。

「君がいつかその役目から解放されたら・・・もう一度、市場で会いたいよ・・・」

ロイは^{つぶや}呟いた。

アテナは、ジョニーを川に残して、ロイのいる岸边に体を滑り込ませた。ナイル川の地平線に浮かぶ空が白み始め、石像たちが日の光を浴びて姿を現し始めた。

アテナは、自分の像に囲まれた場所で、驚いて蜷^{とぐろ}局を巻いて座り込んだ。

「すごい・・・」

遭難した時の座り込むアテナ、石材の上で座り遠方を眺めるアテナ、座り込んで微笑

みながら話しかけているアテナ、スズメを迎える為に空高く手を延ばすアテナ、駆け

ながら振り返るアテナ、髪を洗うアテナ、地面に座り空を見詰めるアテナ、両手を広げ

てロイを出迎えているアテナ・・・どれも今にも動き出さんばかりで、彼女の周りに

並んでいる。

ロイがタガネを置き、出来上がったアテナ像の手を取り、帰ろうとした時、朝日に輝

く大きな白蛇が像の中心に佇んでいるのをみて、腰を抜かした。

「ひえ・・・」

ロイは彼女に襲われると思い、尻を引きずりながら後ずさりした。その時、朝日が白

蛇を照らし、光が彼女を包むと、いつの間にか人間の姿に戻っていた。

ロイは何が起きているのか分からなかった。手を地面につき、座り込むアテナが裸で

あることで、ハッと我に返った。

「え、いやっ、ごめん！なんで・・・これは夢？」

すると、アテナのスズメが舞い降りて、こちらにもまた眩い光と共に老人の姿に変化し

た。老人はサッと手を払うと、アテナは白いローブに黄金の帯のドレスに包まれた。

「これでよし。それでは、話をするとするかの。」

ロイは目を丸くしている。

「スズメさん？」

アテナも戸惑いながら老人に声をかけた。

「わしは、アメン・ラー。エジプトに不穏な未来が見えた故、ファラオの妃となるア

テナを鳥の姿で見守っておったのじゃが・・・」

「た、太陽神様?！」

ロイが^{へいふく}平伏した。

「ああ、青年よ、面を上げるがよい。話しづらいでな。アテナよ、すまぬ。あの呪いを防ぐことが出来なんだ。」

「・・・私はどうなってしまったのですか？」

「うむ・・・。あの魔女の^{しつと}嫉妬の呪いで其方は蛇の姿に^{そなた}変えられてしまったのじゃが、わしの加護の力の及ぶ太陽が出ている間だけ人の姿に戻れる。じゃが、それも間もなく呪いは^{じょうじゆ}成就し、完全に蛇の姿になってしまうじゃろう。それほどまでにあの者の^{しつと}嫉妬の想いは強かった・・・」

「では、やはりあの蛇はアテナ？」

「そうじゃ。」

ロイの問いにラーが答えた。

アテナは下を向いて肩を落とした。

「呪いなのですか？ならば、呪いをかけた術者を倒しましょう。」

ロイはすっと立ちあがった。

「残念じゃが、そうもいかぬ。呪いは術者が死んでも解けぬのだ。」

「そんな・・・、なにか方法はないのですか？」

ロイが食い下がった。

「術者本人が呪いを解く、じゃがそれは望めまい。」

「では、あとどのくらい、人としていられるのでしょうか？」

「定かではないが・・・ひと月と持つまいな。」

「太陽神様なら、なんとかなるのでしょうか?! どうかお願いします！」

ロイはラーの足元に ^{ひざまず} 跪いて、^{こんがん} 懇願した。

「残念じゃが力にはなれぬ。じゃが、方法が全くない訳でもない。」

アテナとロイがラーを見上げた。

「^{そうし そうあい} 相思相愛による真実の愛、その光のみがいかなる呪いも退けることが出来

る・・・。^{こ こんとうざい} 古今東西、そういう理なのじゃ。」

「真実の愛・・・」

アテナが^{ぼうぜん} 呆然と呟いた。

「アテナよ、^{そなた} 其方は愛をまだ知らぬ。それをひと月で知り、かつ愛されなければなら

ない。しかも半日は人ならざる姿で過ごさねばならぬ、これは大変な難題じゃ。」

アテナは黙って俯^{うつむ}いた。

「私、ファラオ様にもう一度会ってみる……。この事の報告だけでもしない
と……」

「ふむ。道理じゃな。じゃが、呪われた者を歓迎してくれるとは限らぬぞ。護衛を付
けよう。セト、そこにおるのじゃろう？」

葦^{あし}の中から、真っ黒な幼犬が現れた。

「わしの仲間のセトじゃ。お主らを守り、我が宿敵を倒すため同行する。」

「ぐ、軍神、セト様？」

ロイが驚いて後ずさりした。

「なれなれしくするなよ、人間。俺は人間界に来た宿敵アペプを探しに来ただけだ。」

「ホッホッホ、じゃが、アテナの呪いは、アペプの呪いの「匂い」がするのじゃろ
う？共に行くべき、と付いてきておったくせに。」

「フンッ。お前の頼みだからついでに護衛してやるだけだ。」

「かわいい～、ありがとうね！」

アテナはセトの前にかがんで頭を撫^なでた。

「やめろ！俺は人間となれ合う気はない。やめろってば！」

アテナはセトに頬^{ほお}ずりして抱きついた。

「お前、絶対に蛇の時にそれ、するなよ！」

「よいよい。すっかり、打ち解けたようじゃな。」

セトがアテナの腕の中からラーを睨^{にら}みつけた。

「さて、ロイ、君にも武器を授けねばな。」

ラーが手を払うと、ロイはギリシア兵の装^{よそお}いに変わった。背中に丸い盾、腰には剣、
商売道具のノミと金槌^{かなづち}は腰の道具入れに追いやられていた。

「神具じゃ、あらゆる者からお主を守ってくれるじゃろう。」

「ありがとうございます。」

「今日は力を使いすぎた。わしは休むとしよう。あとは頼んだぞ、セト。」

ラーはそう告げると、スズメの姿に戻り、アテナのフードの中に入って眠りについた。アテナは、首の後ろで寝ているラーの頭を優しく撫^なでた。

「アテナ、直ぐに発てるか？」

セトはアテナに振り返って尋ねた。

「うん、大丈夫。」

「男の方、お前は下手に喋るなよ。」

「ロイです。宜しくお願いします。」

「フンッ。」

セトは踵^{きびす}を返し、テクテクと二人の前を歩き出した。

「おい、男、あいつに何か声をかけてやれ。」

セトは、肩を落として前を歩くアテナを顎^{あご}で指して告げた。

「そんな、なんて声を掛けたら・・・」

「気を紛らせればなんでもいいだろ。」

「セト様がやればいいじゃないですか？」

「あ？お前は友達なんだろう？・・・それに、俺がやったら、あいつに尻尾振っている

犬にしか見えないじゃないか・・・」

「優しいんですね。」

ロイは微笑んだ。

「貴様・・・、今、俺をバカにしたらろ？」

「いえ、そんな！でも、なぜ、セト様は人間のお姿ではないのですか？そうすれば、

こんな気遣^{きづか}いもせずに済みますのに・・・」

「おい、俺は今、お前に行けと言ってるだろうが！・・・チッ、まあいい、教えて

やる。神々が現世で活動するには肉体がいる。しかし、人間として転生するには神の

評議会の許可がいるのだ。」

「どうしてですか？」

「人は神の器に近いからな・・・。人の姿で転生すれば、神が本来の力を発揮し、こ

の世界の均衡が壊れてしまう。だから邪神アペプを追う任務というだけでは人の姿は

認められぬ。」

「では、アペプも動物の姿に？」

「いや、あいつは直接人間と契約した。」

「^{けいやく}契約？」

「そうだ。生ける人間が神を身の内に受け入れると^{しょうだく}承諾すれば、神は人の心に宿ることが出来るのだ。」

「^{けいやく}契約の言葉・・・」

「なんでもいいのさ。^{しょうだく}承諾さえすれば、な。俺たちは、評議会を無視し、人間に^{やど}宿ったアペプを連れ戻しにきたって訳だ。」

「そのアペプは、危険なのですか？神様なんでしょう？」

「神も人と同じさ。良い奴もいれば悪い奴もいる。まあ、ラーの加護を得る前にファラオを消せば、この世は奴の思い通りになるだろうな。」

「そんな・・・」

「とにかく、お前はそんな心配はせんでいい。こいつは俺の仕事だ。いいから、お前はアテナを、^{なぐさ}慰めてこい！」

セトは、ロイの背後に回って彼の背中を蹴り飛ばした。ロイは弾き出されたようにアテナの背中まで押し出されると、セトを振り返って見た。セトが歯をむき出して^{うな}唸っている。

「えっと、その、大変だったね・・・」

ロイは、アテナの肩を叩き、ぎこちなく話を切り出し、二人が会話していくのをセトは後ろから眺めた。

暫^{しばら}くして、3人はテーベの宮殿の前で立ち止まった。

「俺は先に忍び込んで様子を伺っているからな・・・」

セトはそう告げると、宮殿の塀をサッと飛び越え、姿を消した。

アテナは衛兵の立つ宮殿入り口に歩み出た。

「ファラオ様にお目通りを願います・・・」

2人の衛兵は顔を見合わせた。

「そちらの男はどなたです？」

「砂嵐で行方不明になっていた私の従^{じゅうしや}者です。」

「分かりました。ご案内いたします。」

アテナはロイにウィンクをしてみせた。

宮殿の中庭には兵士や馬が集められ、戦車も用意されていた。

「まるで戦争だ・・・」

ロイがボソリと呟^{つぶや}いた。

衛兵は、中庭を抜け、神々の世界が描かれた廊下を通り、ファラオの寝室へと二人

を案内した。ファラオは家一軒程の広さのある寝室の中央に、アメンホテプと薬師に看病されながら横になっていた。

「ギリシアの姫君と従者のお方をお連れしました。」

ファラオがゆっくりと頷くと、衛兵は退室した。

「お前、人間に戻ったのか？」

アメンホテプが怪訝^{けげん}な面持ちで問うた。

「昼間だけは人の姿に・・・でも、近い将来、呪いは私を飲み込み、一生蛇の姿になります。」

「なぜ、私にその話を？」

ファラオがベッドから上半身を起こした。目にはくまができ、唇は真っ青になっていた。

「殿下、ご無理なさいませんよう・・・」

アメンホテプがファラオを介助した。

「お伝えするのが礼儀かと思ひまして。」

「そうか・・・。礼を言おう。だが、呪われた者と婚姻^{こんいん}を結ぶことは出来ない。すまぬ。」

「はい・・・。それで、あなた様のご機嫌は・・・」

「良くはない。あの魔女を倒すべく兵を招集しているところだ。あの魔女を倒して共

に呪いが解ければよいのだが・・・」

アテナは口を開こうとしたが、俯^{うつむ}いて、口をつぐんだ。

「其方^{そなた}には部屋を用意しよう。我が戻るまでそこで待つといい。」

「それはなりません。」

アメンホテプが立ち上がり、アテナを見下ろした。

「この者が蛇になった時、安全な保障はありません。幽閉すべきです。」

「そこまでせずとも・・・」

「いいえ、この者が祖国にこのことを告げれば、怒り狂った敵国が、魔女討伐で兵が出払った我が都を襲いかねません。これは政略結婚^{せいりゃくけっこん}です。努々^{ゆめゆめ}忘れてなりませんぞ。」

「・・・仕方あるまい。そちに任せよう。」

ファラオはアテナから目をそらし、アメンホテプは肩を怒らせながらアテナに近づいてきた。

「ここまでだ、逃げるぞ。」

ロイがアテナの手を引いた。

「ほら！」

「うん・・・」

アテナとロイはファラオの寝室を出て駆け出した。

「衛兵！ギリシアの姫を捕まえろ！」

背後でアメンホテプの叫び声がした。

二人が中庭まで抜けると、兵達が一斉に二人に襲い掛かった。すると、黒い影が複数
数の兵士の頭、胸を蹴りながら、閃光の様に駆け抜け、二人の前に降り立った。

「ぐずぐずするな、いそげ！」

セトが唸りながら告げた。

二人が宮殿の出口へと駆け出すと、街の方から兵士たちが門から入ってきて立ち塞が
った。背後からは宮殿に集っていた兵が剣を片手に鎧を鳴らして二人に近づいて来
る。

「セト様、背後の兵の足止めを！」

ロイはそう告げると、庭の中央に置かれたアメン神の像へと駆け出した。

「俺に命令するな、人間！」

セトはロイを睨みつけるが、ため息をついて、兵士の前に立ち塞がった。ロイは像の
台座に両手を添えた。

「何をするの？」

アテナは、ロイとセトを交互に見ると、門から迫る兵に後ずさりした。

「こんなの親方の石運びに比べたら・・・、ウオオオオ！」

ロイが足を踏ん張ると、像が動き出した。ロイは像を壁際まで一気に押し進むと、そ

の像に駆け登った。

「早く！」

ロイが手を伸ばした。アテナが駆け寄り、彼の手を掴むと、像の上まで引き上げられた。ロイはアテン像を足場に、直ぐに塀に上ると、アテナを引き上げた。

「セト様！」

ロイは兵士と奮闘^{ふんとう}するセトに声をかけた。セトは像に足をかけ、軽々と塀を飛び越えた。

「さあ！」

宮殿の外に降り立ったロイが、塀の上にいるアテナに手を広げて待ち構えた。

「大丈夫だよ、必ず受け止めるから！」

アテナは目を閉じ、塀から飛び降りた。アテナはロイの胸に飛び込んだ後、ふわりと宙に持ち上げられた。アテナが目を開けると、ロイは仰向けに地面に倒れ、腕で自分を地面に着かないように持ち上げてくれていた。

「大丈夫？あまりに勢いよく飛ぶから驚いたよ。」

ロイはニッと微笑みかけた。

「ごめんなさい！地面に降ろしてくれて、大丈夫・・・」

ロイが腕をたたむと、アテナはロイの腹に腰を下ろした後、彼の手を取り、共に立ち上がった。ラーはくるくると目を回して地面にひっくり返っている。

「イタッ・・・」

アテナは足首を押さえて座り込んだ。

「どこか痛めた？」

ロイが彼女の前に座り込んで尋ねた。

「ごめんなさい、せっかく支えてくれたのに、飛ぶときに足を挫いたみたい・・・」

「兵が来るぞ！」

セトが唸り声をあげた。

「僕の背中に乗って！」

「でも・・・」

「早く！」

アテナがロイの背に乗ると、彼は馬よりも早く駆け出した。セトが前を先行している。

「やれやれ、わしが空から導いてやろう。」

ラーは「チチッ」と鳴くと空へと舞い上がり、皆を導いた。

「重くない？」

アテナは、ロイを気遣って声をかけた。それにしても、彼の脚は本当に速い。セトと並んで駆けている。

「ううん。君って、本当に羽みたいに軽いんだね。」

皆が街の外まで抜けだした時、アテナの体から黒い霧が立ち上がった。

「まずい、日が沈み始めた・・・」

ラーが呟いた。

「ああ、大変！ロイ、早く降ろして・・・」

「え？」

ロイが振り返って、背中のアテナを見ようとした時、背筋が凍るような冷たい感覚が、そして自分の背中に巻き付く蛇の長い影が地面に伸びた。

「うわああああああ！」

ロイは蛇のアテナを振り落とし、前方に転がるように逃げ出すと、背中に毛虫を入れられたかのようにその場で地団駄^{じたんだ}を踏んだ。

『どうしたの？』

ロイが振り返ると、白い大蛇が首をかしげている。

「あ、あ・・・」

ロイは尻餅をついて口をあんぐりと空けた。

「き、君なの？」

アテナは、^{うなづ}頷き、^{うつむ}俯いた。

「ご、ごめん。じ、じつは僕、蛇がとても苦手で・・・」

アテナは目を丸く見開くと、涙が止まらなくなった。

「ごめん、本当に・・・ただ慣れるまで時間がほしい・・・」

アテナは泣きながら首を振ると、^{あし}葦原の中に姿を消した。セトも彼女の後を追って^{あし}葦原の中に入っていった。

「待ってくれ！悪気があったわけじゃ・・・」

「青年よ、アテナを逃がす役目は終えた。お主は、元の生活に戻るがよい。」

ラーはそう告げると、飛び去った。ロイは、足が震え、彼女を追うことが出来なかった。彼は、震える膝を押さえながら立ち上がり、壁に拳を打ちつけた。己の打ちつけた拳の横に『エジプト軍、兵士募集』の張り紙が貼られているのをロイは黙って見詰めた。